

道 徳

宮 島 浩 典

1 道徳教育の本質について

一人一人の児童が道徳的価値を内面的に自覚し これからの自分の生活や行動の中に反映していこうとする意欲や態度—道徳的実践力—を育てること

人間は本来、より善く生きたいという願いを持っている。それは、自分の考えのまま、ありのままに、自由に生きてみたいという思いであり、また、自分を取り巻いている社会や仲間・集団から認められたいという思いでもある。

前者は、一人一人の生活態度に関係する価値判断であり、自分自身の生き方に関わる個人的倫理観によるところが大きい。後者は、社会的ないしは集団的道徳と考えられるもので、集団内に適応する価値判断の総意として示される。

一人一人に、社会的・集団的道徳（慣習、作法、おきて、あるいは常識など）が働き価値を持つには、常に生きている個々人の意識がその中になければならない。一方的な外からの権威や強制・命令という形での注入や教え込みでは、批判・反発を呼び起こし個人に受け入れられない。個人が自分の良心に鑑み、主体的にこれを是認し肯定・同意しながら意識の中に浸透させていってのみ道徳的態度は可能となるのである。同様に、自分なりの価値判断によるところの個人的倫理も社会的集団的な道徳の援助を得てのみ、主観的・独断的な判断や態度を克服することができ、社会の一員としての道徳的態度をとることができるようになる。

このように考えると、二つの事象は相反しながらも互いに補完し成立していると考えられる。つまり、道徳とは、常に自分はどうかあるべきか悩み、迷い、苦しみ葛藤を繰り返しながら価値を自分自身で見つめなおしていく内面的自覚に他ならない。そして、この意識を大切にしながらより高い価値を選択し、自分の生活や行動の中に反映していこうとする道徳的実践力を育てていくことこそ道徳教育の本質に位置すべきものだと考えている。

2 本質に基づく基礎・基本について

道徳教育の本質が道徳的実践力の育成であるならば、そこには当然、自分自身なら「どうあるべきなのか」「どう考えたらいいのか」といった思いが生まれてこなければならない。

しかし、それが単に価値についての理解の中で終わってはいけない。お互いの思いを出しあったり、経験を語ったりする中で、自分とは違う、一人一人の思いを知らなければならない。同時に、これまでの「ものの見方・考え方」を、もう一度問い直すことも必要になってくる。

それが、道徳的価値に照らして自分を振り返り、自分なりの生き方の指標を持つようとすることであり、これを道徳教育における基礎・基本とした。

道徳的価値に照らして自分を振り返り 自分なりの生き方の指標を持つようとする

3 自己の学びを広げ深めるについて

道徳教育において自己の学びを広げ深めていくには、価値への理解・判断とともに、自分自身の考え方や思い（価値観）の変容・認識によるところが大きい。

それでは、自分自身の考え方や思いの変容・認識を促す学びとはどうあればよいのだろうか。これまでの実践を踏まえ、今年度は、更に、「自らの活動を促すゆとり」「一人一人の活動を生かしていく」ということをも加味しながら、次のように考えた。

(1) 資料の効果的な提示・工夫により 意欲を高めることのできる場を大切にす

経験が道徳的価値を把握するうえで重要な役割を果たすことは周知の事実である。しかしながら、道徳で扱う価値は子どもたちにとって抽象的で一般的なものであることが多い。一方、子どもたちの経験は少ない。また、経験があっても特殊なことで価値には結び付かないことが多い。

つまり、価値だけを取り上げては、実践意欲の面から見ると「わかってはいるが」となってしまう、変容を促す学びはなかなか達成されないことになってしまう。

そこで、資料を取り上げる際においても、紙芝居形式で与えたり、ビデオ・録音テープなどの視聴覚教材を利用したりと、様々な形を取り入れながら、想像的な経験を容易にしていけることが大切になる。また、教師が意図的に子どもに経験させたものを教室に持ち込んだり、役割演技や動作化などの追体験を取り入れた工夫的経験などでも、道徳的状况を膨らませていくことが話し合い活動を活発化させたり、意欲を高めていくために重要なことになってくると考える。

(2) 一人一人の姿が現れやすい 価値葛藤の場を設定する

人間は現実の生活において、価値葛藤の場に直面することが多々ある。それは、常に自分なりの考えと内面における意識との間の揺れや、迷いにより生ずるものである。「どうあるべきなのか」「どちらを選択すべきなのか」、道徳の学習を通して互いの意見を交流させたり、認め合ったりするなかで、一人一人が持つであろう揺れや迷いを大切にしていきたいと考えている。そのことが、生きた人生の問題を含む現実と正面から取り組んでいる一人一人の姿が現われる場面となり、価値の対立、葛藤を克服し、実践意欲につながる活動に結び付くことになると考えるからである。

(3) 自己の価値観を認識する場を設ける

自分なりの意識や考え(価値観)をみつめていくことは、道徳では大切なことである。自己の価値観を認識しておけば、最初の自分から学習し高まった自分をふりかえる基準が持てることになるからである。これまでの思いはこうだったが、今は少し考えが変わったように思う等、自分の考えを明確化できることとなる。

また、自己を振り返ったとき、自分の考えを変えていく要因となったものは何であったのかも自己内対話を通して自覚できることとなる。それは、意見交換や交流の中での他者の影響であったかもしれないし、他の意見の中に自己の内にはまだない、より高いものとの出会いであり、深まりであったかもしれない。あるいは、その価値に対しては考えを少しも変えない自分との出会いがそこにあるかもしれない。

そこで、一人一人が自己の持つ価値観を認識する場として、グループ学習、ペア学習などの形態の工夫や、板書におけるマグネットシートの利用、あるいは、自分の思いや考えをワークシートに表わしてみるといった活動も取り入れていきたい。

それが、自分自身への気づきや変容となり更なる実践意欲につながっていくためには大切であると考えるからである。

(4) 他の教科との結び付きを深めたり 体験活動を取り入れた道徳の時間を計画する

道徳における時間配置においても、一単位時間だけの道徳教育ばかりではなく、ゆとりを持たせながら、他教科、特別活動、総合との結び付きや関連を更に深めた学習の構想に留意していくことが必要となってくる。抽象的で一般的な道徳的価値と体験などでの具体的な行為を結び付けていくことで自己と対象とがより深く関わり合い、一人一人の活動や思いを生かしていくことにもつながっていく。そんな中、より多くの体験を重ねていくことで、子どもたち自身が自己の内面に働きかけ、自らが変容を期す力を備えてくれればと願っている。